大賞

政子ばあちゃんの百年、私の十二年

藤本　花音

六月のある日、塾が終わって車に乗ると、「ばあちゃんがきとく。今から病院行くよ。もう最後かもしれんけんね。」

と、お母さんが言った。

急いで病院へ行くと、ナースステーションの横の四人部屋にばあちゃんはいた。

顔をしかめて、ハァハァと苦しそうに肩で息をしている。鼻には酸素の管がつながれていた。

「ばあちゃーん。花音がきたよー。」

と、お母さんが耳元で声をかける。

私もお母さんも、ガリガリの細い手首をもって、手をさすった。それ以外、何もする事ができなくて、ばあちゃんの、ハァーハァーと苦しそうな息づかいが聞こえている。

「おばあちゃん、ありがとう。おばあちゃん、バイバイ。」

私は、もうおばあちゃんに話しかけるのは最後かなぁ。と思いながら大きな声で言った。ばあちゃんは目をあけず、苦しそうなままだった。

家に帰って、お母さんは京都に住む妹に電話をしていた。

「まだ分からんよ。連絡があってからでいいけれ。でも、も服だけ用意しとったほうがいいよ。」

そんな話を聞くと、さっき苦しそうにしていたばあちゃんの顔がうかんできて悲しくなってきた。

今度こそ最後かもしれないと思っていた。

実は、ばあちゃんに、バイバイを言ったのはもう三回目くらいだ。

具合が悪いと会うたびに、心の中で最後と思ってバイバイしてきた。今度は本当に苦しそうだった。もうダメだと思った。

しかし、なんと、今回も入院して十日くらいで、きとくだったばあちゃんは老人ホームへ元気になって戻ったのだ。

本当にすごい。

ばあちゃんは、私のひいばあちゃんにあたる人だ。私のお母さんのお母さんのお母さんだ。

名前は政子さんと言い、大正三年生まれで、もうすぐ百歳になる。寝たきりになってしまっているけれど、心臓と内臓がとても丈夫で長生きしていて、今度北九州市から百歳のお祝いをします。と連絡がきた。お誕生日のお祝いをしてくれるなんて、多分すごい事だと思う。今の丈夫さで百歳を迎えてほしいし、私も一緒に、百歳をお祝いしたい。

老人ホームの看護師さんから、

「百歳のお祝いできるといいですね。」

と、言われて、お母さんは、

「ばあちゃんっち本当に長生きよね。あっという間の百年だったんかねぇ。」

と、私に言った。

「百年っち長いよね。ママあと 六十年以上生きないといけん。」

と、言って笑いだした。

だから、私はばあちゃんについて百年分は書けないけれど、聞いた話と、私が生まれて十二年分の思い出と一緒にばあちゃんの百年の歴史にして書いてみようと決めた。

まず、話を聞いた人を書いておくことにする。

政子ばあちゃんの長女である嘉子さん。私は「よしちゃん」と呼んでいる。若く見えるけどもう七十四歳だ。もう一人は、私のおばあちゃんで政子さんの三女、裕子さん。おばあちゃんと呼んでほしくないという理由で「ヒロ」と呼ばされている。よしちゃんと、ヒロの間には次女の満子さん。「みっちゃん」がいるけれど、博

多に住んでいるのでみっちゃんには話が聞けなかった。

それでは、ばあちゃんの百年の歴史に入ろう。

第一次世界大戦が始まった一九一四年、大正三年二月二十三日、豊前市八屋で政子ばあちゃんは生まれた。

家は代々続く百姓で、川のま横にある大きな銭湯も経営している、けっこう裕福なところに生まれたらしい。

三人兄弟の末っ子一人娘だったので、お兄さん二人がとても可愛がってくれた。お母さんも小さい頃、「兄さんがね…」とばあちゃんが独り言のように思い出をよく話していたのを聞いたらしい。

中津にある、扇城高等女学校へ通うようになって、もう八十年は経っていると思うけれど、ばあちゃんの女学校時代の写真が大切に残っていた。よしちゃんが、

「ばあちゃんこんなしかめっ面で写ってるよー。」

と、写真やへその緒を出してきた。よしちゃんのへその緒の箱の裏には、産地・小倉市旦過市場と書いてあってみんなで大笑いした。

ばあちゃんは、女学校へ通っていたけれど、長男のお兄さんは学校に行かずに働いていたらしいので、ずい分ばあちゃんはお嬢様扱いされていたのかなと思った。

扇城高等女学校を卒業すると、次男のお兄さんを頼って、都会東京へ。東京では、日本大学に通っていたお兄さんの池袋の下宿でお兄さんのお世話をしていた。

そのお兄さんが、国鉄に入社して転勤する事になり、今度は長男のお兄さんをまたまた頼って昭和八年、永住することになった小倉市へ。

小倉では、乾物屋をしていたお兄さんの店を手伝いだした。

そこで、未来のだんな様である政葆(まさかね)さんと運命の出会いをする。

ばあちゃんはその頃、外交官の人とお見合いする話があり、お見合いする気だったけれど、お兄さんから、かせぎの良かった政葆さんと結婚しなさい。と言われ、二十一歳で結婚する。

私のひいじいちゃん、政葆さんについてもう少し紹介しておく。

ひいじいちゃんは、お兄さんのお店につけものなどを卸していて、働きものの商売人だった。ばあちゃんと結婚する前に、結婚していたが、奥さんも子供も亡くなってしまった。

ばあちゃんは、大正の人ではめずらしく一六〇センチ近くも身長があり、丈夫そうに見えたのかもしれない。健康な人がお嫁さんに来てくれてうれしかったと思う。

二人は結婚して、昭和十二年に「実（みのる）」という男の子が生まれた。昭和十四年には、「嘉子」よしちゃんが生まれ、忙しいけど商売も子育ても順調だった。

けれど、小倉の町にも戦争の影響で乾物やつけもの、こんにゃくを作る材料がなくなり、じいちゃんにも、兵隊に入るようにと知らせがきたので旦過市場の店はやめなければいけなくなった。

じいちゃんは、戦争で、自分が戦地へ行かなければいけないと考えて、前もってばあちゃんに沢山の物を残して行った。

まず、同じ乾物などを扱っていた五人の商売人の人と五社合併をして、戦争が終わるまで一つの店に望みをたくした。自分が帰って来たら、すぐまた商売ができるようにしておかなければいけない。と言っていたそうだ。

もう一つは、貸家を何軒もつくり、長い間自分がいなくてもお金と住む所に困らないようにしておいた。

昭和十七年、政子二十八歳、実五歳、嘉子三歳でじいちゃんは満洲へ行ってしまった。この時ばあちゃんのお腹には、次女のみっちゃんがいた。

よしちゃんは、慰問袋を作って、門司へ、ばあちゃんと実さんと兵隊さんを送りに行ったのを覚えているらしい。

じいちゃんが戦争に行ってから、ばあちゃんは一人で子育てに追われた。満洲に行ったじいちゃんからは、女の子ならば満州の子と書いて満州子（ますこ）にという名前にして下さいと手紙が届いた。満州子にはしなかったけれど、みっちゃんはじいちゃんが満洲に行っている時に生まれた子供なので満子（みつこ）という名前になった。お母さんは初めてその話を聞いたと言って、ゲラゲラと笑っ

ていた。

でも、私は、ばあちゃんが満州子と名前をつけなかったのは何となく戦争のことを思い出してしまって嫌だったんじゃないかな。と思った。

みっちゃんが生まれて、戦争がますます激しくなっていき、お金を持っていても物がなく、何も買えない暮らしが続いた。

昭和十九年、長男の実さんが風邪をこじらせてずい膜炎になり、七歳で亡くなってしまった。一人で一生懸命子育てをしていたばあちゃんには、本当につらいでき事だった。

その上、小倉の町にもB29が飛んできて焼夷弾を落としに来た。八幡に、武器工場があったからだ。

ばあちゃんは、家の前の防空壕の中でガタガタ震えるよしちゃんとみっちゃんを必死に守った。

「家や、人がふっ飛ぶのを見たんよ。今の大手町のあたりはひどかったよ。小さいみっちゃんを連れて、子供だけで石炭を拾いに行きよったんやけね。」

と、よしちゃんは言った。

今では、子供がそんな事するなんて考えられない。戦争中は、物もないし、どんな人でも生きる事に必死だったんだろう。

私は戦争の事は、学校の体験談とはだしのゲンでしか知らない。はだしのゲンを読んだ時は、本当にこれがあったのかと考えると恐くてゾッとした。信じられなかった。

「ねぇ、よしちゃん。原爆が落ちた時、もうよしちゃんって生まれてたと?」

と、思わず聞いた。

「そうよー。当り前やーん。生まれとったよー。」

と、よしちゃんは驚いた顔で答えた。

ばあちゃんと、よしちゃんも、戦争を体験した人なんだと今さら私も驚いた。

「あまり人に言いたくないだけ。」

とも言った。少しさみしそうだった。ばあちゃんも、お母さんに同じような事を言った事があるらしい。

昭和二十年、八月六日に広島、九日に長崎に原爆が落ちた。

本当は、北九州が原爆の第一目標だった。

もし、あの日、図書館のところに原爆が落ちていたらばあちゃんは生きてないだろう。ヒロも生まれてないしお母さんも私もいない。

終戦の日、

「戦争が終わった。」

ばあちゃんは一言よしちゃんとみっちゃんに言ったらしい。

私は、今、この文章を書きながら、何度も息がつまった。私の話ではないけれど、文章にするとまるで私も一緒に体験した気持ちになる。お茶を何杯も飲んだ。

戦争が終わり、じいちゃんが帰ってきた。実さんが亡くなった事を聞いて、ものすごいショックを受けて悲しんだそうだ。そのじいちゃんを見て、みっちゃんは、

「この人お父さん?」

と、よしちゃんに聞いたらしい。

じいちゃんとばあちゃんは、戦争の間に、跡とり息子を亡くして、新しく娘が生まれた。

じいちゃんは、こんな時に側にいれなかった事がつらかったと思う。ばあちゃんは、一人で心細くて不安だっただろう。

一家は、笹原と言われていた現在の片野で新しく商売を始めた。何もない田舎だったが、戦後あっという間にたくさんの家が建ったらしい。戦争前に合併していた会社も、各個人にもどして夫婦でがんばって働いた。

うれしい事に、すぐばあちゃんには男の子が生まれた。「清一(せいいち)」と名前をつけた。昭和二十五年に、私のおばあちゃん「裕子(ひろこ)」(ヒロ)も生まれた。

清一と名づけたせいちゃんは、ばあちゃんの自慢の息子だった。

足立中学校で優等賞をとったせいちゃんの事を、とても喜んで、

「商売人ではなく大臣にせんといかん。」

と、じいちゃんは言っていたそうだ。

ばあちゃんは、
「母の日に、薪をおこして釜戸でご飯とみそ汁を作ってくれた。」
と、うれしそうに言っていた。
せいちゃんは、よくしゃべる人で、ばあちゃんにとても優しく、実さんの分までばあちゃんに親孝行した。
末っ子のヒロは、せいちゃんがあまりにもできる息子だったので、ちょっと性格がひねくれたけど、まぁまぁの娘さんに育った。
じいちゃんは、商売を子供達に継がせるつもりだったけれど、ばあちゃんはあまり賛成しなかった。工場が火事になったりして、苦労したからだろう。
昭和四十年頃には、よしちゃんとみっちゃんは、結婚しておむこさんをもらい、商売を継いでいたので、料理上手なばあちゃんは工場で働く人達のために、毎日昼ご飯を作っていた。
働きすぎて、背の高いばあちゃんは、早くから腰が曲がっていた。

昭和四十四年、じいちゃんが、大きな釜の鍋に落ちて突然死んでしまった。
じいちゃんは、六十二歳。ばあちゃんは、五十五歳だった。
悲しい出来事だったけれど、ばちゃんには頼りになる娘と息子がいた。
せいちゃんは、大臣にはなれなかったけど、早稲田大学へ入り、大学の先生になった。
ばあちゃんは、東京のせいちゃんが小倉に帰ってくるのをいつも楽しみにしていた。
ばあちゃんは、ヒロが結婚する頃には、今まで苦労した分、海外旅行に行ったり、九人の孫の世話をして自由に過ごした。子供や孫たちと暮らしにぎやかだった。
「多分、一番幸せな時だったよ。」
と、ヒロが言っていた。
ばあちゃんはいつも昼ご飯を作ったら、ワイドショーを楽しみにしていて、小学生のお母さんより芸能ニュースに詳しかったらしい。

それと、「暴れん坊将軍」が大好きで土曜日にばあちゃんの部屋で一緒に観ていた。お母さんも、ばあちゃんの影響を受けすぎてテレビが大好きだ。

ばあちゃんは、おっとりした性格だったので、誰も怒られた記憶がないらしく、恐いお母さんを持つ私はかなりうらやましい。

私も、老人ホームで会うばあちゃんは、ニコニコしている顔ばかり思い浮かぶ。

ばあちゃんの歴史を完成するために、書きたくないが、最も悲しい事を書かなければいけない。

それは、愛する息子せいちゃんが、ばあちゃんより先に死んだ事。

おしゃべりとお酒が大好きで、親孝行だったせいちゃんは、五十年も生きずに亡くなった。

お葬式では、早稲田の校歌を流して出棺した。同級生もたくさん来て、みんな涙を流して歌ったと言っていた。

せいちゃんが亡くなって

「寅年は男が育たん。」

と、言ったおばあちゃん。

どんな気持ちだったんだろう。

長生きしすぎて、家族や友達が先に亡くなっていい事ばかりじゃない。

悲しい事を書いたので、今度は明るい事を書こう。

平成十三年六月二十日、十番目のひ孫として私が生まれた。生後一ヶ月で初対面した。抱っこしてもらい、記念撮影をした。「花音」と写真に書いて、渡した。名前を書いておかないと、十一人の孫と十人のひ孫の名前を覚えきれないとお母さんは思ったらしい。今も、その写真は棚にかざってある。

私の後に、ひ孫が五人生まれて、ちょうどばあちゃんの百歳の誕生日ごろ、十六人目が産まれる予定になっている。

元気だったばあちゃんは、毎日三階まで階段を上り下りしていた。

ある日、ヒロに電話がかかってきて、

「階段で頭を打った。」
と、言うので家に行くと、紫色の顔をしていてすぐ入院になった。私もお母さんと一緒に病院へ行くと、こう膜下血腫と診断されベッドに寝ていた。
私とお母さんを見ると、
「一緒に帰る。」
と、言っていたが、三日後に行くとお母さんの事が分からなくなっていて、一週間で、いろんな事が分からなくなり、老人ホームへ入居した。
入居先の老人ホームは、私の通う幼稚園のとなりだったので、ひなまつりや敬老の日などホームへ行って歌ったり踊ったりした。私は、車イスに座っているばあちゃんにいいところを見てもらおうとはりきっていた。
調子がいいと、私のことも分かる時があるのでホームでは、いっぱい話しかけてみる。
お母さんが、
「ばあちゃん、帰るね。」
と言うと、
「もう帰るんね。」
と、必ず同じこと言ってさみしそうだった。
少しずつ認知症もすすんでいって、私の事はほんの少ししか覚えていないかもしれない。「よしこさんと、みっちゃんは来たかね?」と言った時だけ、うんうんとうなずいたり、じいちゃんにそっくりだ。というお母さんのいとこが面会に来ると、とてもうれしそうだった。
数年前に肺炎になってからは、寝たきりになってしまった。言葉もだんだん話せなくなった。
会いに行っても眠っている時が多く、もしかすると昔のことを思い出して夢を見ているのかもしれない。
今回、ばあちゃんの話を聞くために、久し振りによしちゃんやおじちゃん、お母さんのいとこに会った。ばあちゃんの話を、ああだった。こうだった。と大声で話した。途中、戦争や、よしちゃんの話になったり、他の話でみんなが笑った。あっという間に時間が過ぎていった。
いつか、誰かが私のこともこんな風に話してくれるの

か。そんな事を考えた。

最後に、大正、昭和、平成と百年生きてきたばあちゃん。

戦争で子供を守るために強く、たくましく、生きてきた。

女学校の同窓会も八十八歳まで別府へ行った。毎年少しずつ来れなくなる人がいる中、最後の同窓会まで友人に会いに行った。

つらくて悲しい事も多かったけれど、たくさんの家族がばあちゃんの事を笑って話せる。

ねぇ、ばあちゃん。

すごいよ百年って。